



**\*互いに祈りあってますか**

# 説教要約

ルカによる福音書 19 章 1-10 節

「情熱が重なり合う時」

## ①導入(二つの情熱)

とてもお世話になった学校の先生がいます。中学 3 年生の担任の先生です。小柄な女の先生でした。いつもニコニコしていて、とても生徒に対して熱心でした。一方私は、学校があまり楽しくないと思っていて、学校行事に対して消極的でした。運動会も文化祭も、合唱コンクールも「面白くない」「やる気ない」「サボろうかな」とその担任の先生によく言っていました。

実際の所、そのように言っているのはクラスの中で私だけではありませんでした。同じような事を生徒たちは先生に言っていました。生徒が口々に学校生活に対して否定的な事を言う時、先生はよく泣いていました。しかしそれは生徒を心から思いやって、涙の訴えかけでした。「一度しかない学校生活だよ」「みんなでやると楽しいよ」「協力するからやってみよう！」そしていつも、「先生がいうからやってみよう」と生徒たちは立ち上がるのでした。

運動会で徐々に結束し、文化祭は生徒が台本を書き、ドラマを撮影しました。連日夜まで準備しました。そして卒業前の合唱コンクールは入選しませんでした。音楽の先生が私達の合唱を聞いて泣きました。こうして3年2組は結束を強めていきました。このように一生懸命に学校生活を打ち込めたのは先生が私達生徒に対して情熱を注いでくれたからです。今日のザアカイの話は、イエス様の情熱とザアカイの情熱、二つの情熱が重なり合った話です。

## ②本論(情熱が重なり合う時)

ザアカイはイスラエルの同胞から罪人呼ばわりされていました。(ルカ 19:7) それはつまり「私達とあなたは対等ではない、同じ仲間でもない」と暗に言っているのです。最初、ザアカイの情熱の矛先は彼らを見返す事でした。ザアカイは取税人の頭まで上り詰め、大金持ちになりました。しかし彼の心は満たされなかったのです。そこでザアカイの情熱はイエス様に向けられました。彼のイエス様に対する情熱は彼の行動が語っています。人に後ろ指を指されても、人に遮られても、イエス様を一目見たかったのです。

イエス様の情熱はこの話の中で徹頭徹尾、示されています。まず、1 節。これはザアカイに会う為の序文です。そして、この話の中心は「きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」この文はイエス様のザアカイに対する、いつまでも仲間、友達、対等だと言う事の決意表明です。そして 10 節はルカによる福音書の要約とされています。つまりイエス様はザアカイを見つけだして救うまで探し続ける方だということです。このイエス様の情熱、そしてザアカイのイエス様に会いたいという情熱(これもイエス様に与えられたもの)、この二つの情熱が重なった時、ザアカイの中で救いの喜びが爆発したのです。

イエス様は厳密には“罪人と呼ばれる男の客になりました”。そして、それはイエス様が罪人の仲間である、罪人として扱われる事を意味します。ザアカイは立ち上がり、イエス様に貧しい人への施しと、だまし取ったお金を 4 倍にして返す事を告白しました。しかしこれは彼の罪滅ぼしではありません。周囲に“イエス様を罪人呼ばわりさせない為です。つまり、“イエス様が来られた本当の意味を正確に伝える”と言う事です。一言でまとめると、イエス様の情熱、“愛”に応えると言う事です。これが最終的な彼の情熱の矛先です。

## ③結論「情熱の向ける方向」

心理学の観点から、燃え尽き症候群になる一つの例は設定した目標と現実には大きな隔たりが生じた時です。つまり設定した目標が高すぎる壁となり、壁をただ眺める日々によって、自暴自棄に陥っていくのです。その対処法は大きく 2 つで、1つは過剰に上げすぎた目標を下げる事。そして自分を許し認め、小さな目標を積み重ね自分を高める事だと学びました。

ザアカイの話の観点から、私達にとって大切な事は“情熱はイエス様から来る”と言う事です。探しに来てくれたイエス様。ありのままを愛され、愛された自分が出来る事をする。イエス様の情熱が自分の情熱となり重なり、溶け合って行く時、障害や壁は問題ではなくなります。根本は壁を超える事が大切なのではなく、上ろうが下がろうが、いつも一緒にいてくれる方と人生を楽しみ歩む事が大切なのです。

大切な事は情熱の向ける方向です。何の為に、誰に燃やす情熱かが大事です。信仰の世界はシンプル・イズ・ベストです。つまりイエス様の愛に応える生き方が最高の人生です。イエス様の情熱を自分の内に燃やし、隣人にイエス様を証しして参りましょう。